小田切 進エッセー選 Ⅱ

年年歳歳

博文館新社

小田切 進

エッセー選 Ⅱ

年年歳歳

〈著者略歴〉

小田切　進（1924～1992）

大正13年東京生まれ、早稲田大立教大学名誉教授。文芸評論家。文学館理事長、県立神奈川近代日本文芸家協会理事。主著に『昭和文学の成立』（勁草書房）『現代日本文芸総覧』4巻（明治文献、毎日出版文化賞受賞）『日本近代文学の展開』（読売新聞社）『日本の名作』（中公新書）『文庫へのみち』正・続（東京新聞社）『近代日本の日記』正・続（講談社）『作家の肖像』（永田書房）などがある

小田切（おだぎり）　進（すすむ）エッセー選（せん）Ⅱ　年年歳歳（ねんねんさいさい）

1993年5月28日　初版第一刷発行

© 著　　者　小　田　切　　進

発 行 者　大　橋　一　弘

発 行 所　株式会社博文館新社

〒112 東京都文京区小石川2-14-6

電話　03-3811-4721（代）

ファクシミリ03-3818-1431

振替口座　東京9-55050

印刷・製本　共同印刷株式会社

落丁・乱丁本は送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-89177-934-9 C0095

年年歳歳花相似
歳歳年年人不同

年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じからず
（『唐詩選』より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年年歳歳　目次

I　幻の本と雑誌を求めて

消えはじめた活字……13
不器用な情報収集家……17
コンピューターとわたし……20
幻の本を求めて……23
『若菜集』など 23　漱石の『猫』の初版 24　一度は諦めた『みだれ髪』 26
発禁本『ふらんす物語』 27　最も初期の讃美歌本 28　二種類見つかった『雁』
『春琴抄』初版本 30　部数の少ない詩集にも必ず〈愛蔵者〉 32　鷗外が立案
した地図 33
稀覯の雑誌「マヴォ」をさがす……36
年表を編む……42
目録に溺れる—わが銷夏法のひとつ……46
索引の威力—日本索引協会第一回大会記念講演……49
『日本近代文学大事典』のこと 51
『東京名所図会』—索引によって有り難さが大きくなる……56
索引を愉しむ……58

ぶらぶら文化論……63
吾輩は〈笑いの文学〉の傑作である 63　井上靖の『孔子』 64
稀な天才モーツァルト 65

II 日本近代文学のうちそと

日本文学の流れ—近代から現代へ……71
新しい文学 71　硯友社と浪漫主義 72　自然主義の時代 74　明治から大正へ 75　新世代の台頭 77　戦時下の作家たち 78　戦後文学の出発 80
混沌たる開花 82
ひとつの新聞小説史—「東京新聞」の創刊百周年……84
明治の終焉—大逆事件と文学者……88
匿された真相 88　蘆花〈謀叛のすすめ〉 89　啄木が受けた衝撃 90　国家権力を批判 91　「実行」の決意 92　長い〈冬の時代〉へ 95
文学に描かれた教師像……99
独歩と蘆花 100　漱石『坊っちゃん』 101　啄木と花袋 102　龍之介と有三 103
戦後の教師像 105

筆禍史……106
或る文学賞の半世紀—芥川賞の創設と歴史……126
芥川賞までの〈文学賞〉126　芥川賞の成功133　芥川賞を育てた人143　初期からドラマティックな文学賞149　太宰治の〈芥川賞事件〉155　銓衡委員が果たした役割164　新しい歴史を創る172
或る出版社の記録—読める目録をつくる……179
それまでの書目にない工夫をする179　惜しげもなく貴重なデータを180
明治の料亭・レストランで……183

Ⅲ　雑誌—興亡盛衰小史

昭和の雑誌盛衰記……193
疾風怒濤の時代194　二十世紀芸術の模索と実験216　戦争下の時代—いわゆる〈文芸復興期〉から昭和十年代へ226
「新潮」の足跡……236
武者小路実篤と「白樺」が残したもの……263

「中央公論」と大正デモクラシーの高揚……268
吉野作造の民本主義 268　大正デモクラシーの絶頂 270　理想主義の流行 271
無政府主義・社会主義の動向 273
「文学界」の歴史……276
「群像」の歩み—ひとつの役割……288

IV 文学者の書

文学者の書……309
明治の文学者の書 309　二葉亭四迷「落葉のはきよせ」 311　森鷗外が長男於菟に与えた色紙 312　芥川龍之介愛蔵の漱石山人の書—豊かな情感あふれる漱石 313
芥川龍之介の句帖 315　太宰治の「待ち待ちて……」の書 315
漱石の書画……317
相馬御風の書……318
漱石・御風の遺墨集を見る……320
志賀直哉の絵と書—のびやかで、勁く……323

谷崎潤一郎—繊細で、典雅な美……327
思想家・学者・芸術家の書……330
初出一覧……333

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年年歳歳

小田切 進

博文館新社

I

幻の本と雑誌を求めて

消えはじめた活字

しばらく前、やむない必要が生じて、二十年ぶりに戦争中から戦争直後へかけての新聞・号外、文化団体の声明書などの類を出して見た。そんなにたくさんあるわけではないが、ものごころつく頃から、その種のものを蔵いこむ性癖が多少あったのか、わたしの所には未だ小学生だった筈の二・二六事件の日の新聞、その頃からの映画や芝居のプログラム、日華事変勃発や太平洋戦争開戦の号外、尚江、藤村、秋声、秋江らの死亡記事、諸家の追悼文が載った新聞等々が残っている。

本格的にそうした資料をとっておくようになったのは、やはり生き残ることが出来た戦後からだが、中学生になって以後の分を通算すると、ざっと四十五年分にもなるから、かなりの量である。

はじめは原則としてスクラップ・ブックを使い、新聞全紙を残す場合は、大判の紙袋に入れた。が、戦後はとても追いつかず、関心のある人名、テーマ、事項別に千枚ほどの大型の封筒を五十音順にならべ、その都度押し込んでおいた。伊藤整さんに教わってから、蔵っておく余地のない定期刊行物は破りとり、抜刷、内容見本、グラビアなど訪問記の類、展覧会のチラ

シ・図録、さらに出版記念会の案内や死去の通知にいたるまで、いっさいを封筒に収めてしまうことにした。三島由紀夫、川端康成、高見順三人の封筒が最も多く、次いで太宰治、夏目漱石らがかなりの容積をしめている。

やがて袋が手に負えなくなり、ロッカー数本を調達した。そうすると具合がよく、早く片づくようになった。前に大新聞社数社の資料室を使わせてもらい、恩恵を受けたことがある。新聞社にくらべて範囲はもちろん狭いが、文学に関しては恐らく数十倍くらいの量になる。

しかし去年、彦根でみせてもらった舟橋聖一文庫の舟橋さんに関する資料は、驚異的で、とても太刀打ちできない見事なものだった。大宅壮一文庫にも感心した。松本克平の新劇資料、荒正人の夏目漱石、秋庭太郎の永井荷風、紅野敏郎の白樺派、保昌正夫の横光利一、野口碩の樋口一葉なども、恐らくわたしなどの比ではないスケールのものだろう。が、そろそろわたしは面倒になってきた。その割には使わないので、もうここ数年は怠け、手を抜いていた。

ところが、この春、戦中から戦後へかけて出会った人、交わった人たちのことを書く時、このミニ資料庫が俄然役立った。ロッカーや、それからはみ出して書庫の奥に積んでおいた封筒を探し出してくると、忽ち幾つものアヤフヤな記憶がたしかめられ、さらに古い記憶がうかんでくる。佐々木基一『鎮魂』に出てくる〈ロウポウ〉という研究会のことは、そのラベルのついた袋に当時のくわしい記録が収められている。〈近代文学〉という袋には、同人の創刊挨拶状や松戸会議の家の地図も入っている。〈文学時標〉の袋をあけると、アルバイトの広告とりと、大組みを受けもったので、〈虹書房・水上勉〉の名刺や、原稿が幾つも入っている。印刷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com